

# ぶらりわが街宮沢界限

## (24) 養蚕(ようさん)・蚕種(さんしゅ)・製糸(せいし) — I — 農家の副業から主要産業へ

明治30年(1897)頃から昭和10年(1935)頃まで、宮沢・大神・中神・田中等の旧昭和村の気象風土は養蚕に適しているため、農家は軒を連ねて養蚕に着手、田畑は一大桑園(そうえん)化し、昭和5年(1930)ごろの生産高は東京府下の約30%を占める盛況で、全国屈指の養蚕村となりました。その後、軍需工場や宅地化で桑畑も、養蚕農家の家造りも近代的となり、過去に行われたことを知るのとはごく限られた場所ではなくなった。

- ・「養蚕」—蚕(かいこ)を卵から給桑(きゅうそう)で飼養(しやう)して繭(まゆ)をとること。
- ・「蚕」—鱗翅目(りんしよく)カイコガの幼虫。孵化(ふか)したときは黒くて毛があるが、第1回の脱皮(だっぴ)で毛が抜けて灰色になる。4回の脱皮(「とまる」という)を経て、絹糸を吐いて繭を造り、中で脱皮し蛹(さなぎ)になり、羽化(うか)しカイコガになって、繭を破り出て産卵し、後死ぬ。
- ・「繭」—昆虫の蛹を保護する包被(ほうひ)。蚕のものは、黄、白の二種。俵(たわら)型、球型、楕円(だえん)型などがある。いずれも生糸(さいと)の原料。
- ・「桑」—クワ科の落葉喬木の総称。年々養蚕で刈り取られるから長大のものは少なく、雌雄異株。葉は深い切り込みのあるものと全縁のものがある。葉は養蚕用として重要。
- ・「蚕種(さんしゅ)」—蚕の卵、孵化(卵がかえること)して蚕となるもの。
- ・「生糸」—蚕の繭からとった繊維(せんい)をよりあわせたままで、まだ練らない絹糸。

我が国の養蚕も中国の歴史書「魏志倭人伝(ぎしわじんてん)」にみられるように弥生時代までさかのぼります。江戸時代になると市域の「村方明細帳」には蚕のことが散見されはじめ、享保5年(1720)上川原村に、書き上げがあり、天明元年(1781)拝島村に絹織物の市がたったことや、天保10年(1839)上川原村に繭の仲買商がいたことなどがあげられています。「養蚕指導書」も著(あらわ)されて、養蚕が農家の副業として進んでいたことがわかります。

それが幕末の安政6年(1859)横浜・長崎・函館の三つの港で交易が開始され、中でも交易の中心は横浜港で、蚕種や生糸の輸出が盛んになり、特に生糸は輸出総額の7~8割を占めていて、生糸を作り海外に流出すれば高く売れるということで、関東山麓一帯の村々は養蚕、製糸業に力を入れ、わが国養蚕地帯の一つとなったわけです。そのころヨーロッパでは蚕の微粒子病(びりゅうしびょう=蚕の伝染病の一つ、幼虫の初期、微粒子病原体に感染すると、微小な黒褐色の斑点を生じ、発育を障害され、遂に死に至る)が流行り、わが国の無病の蚕種を求めたからでした。

明治30年(1897)ごろからは養蚕も次第に副業から農村の主要産業に成長発展しました。しかし昭和時代に入ると経済恐慌(きやうこう)や化学繊維の発明、戦争の影響を受け、特に昭島市域には昭和13年(1938)ごろより急速に軍需工場の昭和飛行機工業(株)をはじめ、その他多くの協力・下請工場があいついで設立されたため、養蚕、製糸業は衰退してしまっただけです。戦後一時復活したとはいえ、もうそれは昔日(せきじつ)の栄えは望むべくもなかったのです。

記 防犯宮沢支部会計 西山 禎一

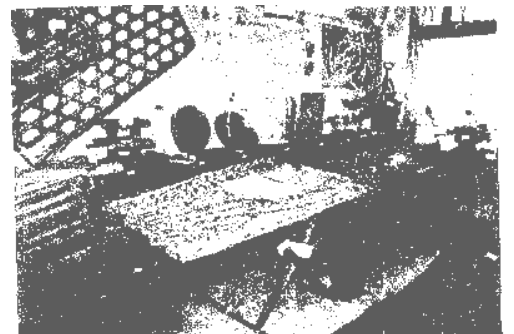
### 郷地の大桑(郷地町1-23-9宮崎家屋敷内)

(昭島市指定天然記念物昭和46年(1971)1月9日指定)

桑の木としては珍しい大木で、幹まわり約2.1m 樹齢約200年以上といわれる。葉脈が太く、十文字桑に改良される前と思われ、かつて、当地域で、養蚕が盛んであつたことがしのばれる。

(\*昭和42年(1967)の台風の際、太枝2本が折れてしまった。

現在、幹全体の葉がまったく出てなく枯れていると思われる。)



養蚕に使った道具(市立拝島第四小学校民具展示室)